

主人公は、戦前、三井三菱を向こうにまわして神戸の一介の砂糖商からいま総合商社のモデルにも成り上がった「鈴木商店」とその屋台骨を支えた人々。「海鳴りやま」。案・坂井時忠兵庫県知事、脚本・花登篤、プロデューサーがあなた。

「ふしこに神戸を舞台にした劇がない。NHKの『風見鶏』? あれはTVドラマで

伊藤邦輔

そのクライマックス。焼け落した店舗前

に、主人公の鈴木よね

(月丘夢路)と番頭の

金子直吉(藤田琢也)

が言う。「海はらつと

も焼けてへんない

か」「海がある限り『鈴木』

がなかつたらいま

の日本の繁栄もな

かったと思う」

さつきをもううづさせた場面だ。「賣い占めほ、商うの本能みたいなもの。社会正義とは、あいられない

面もあるが、商社がつまら『鈴木』書く。花登さんが書きにこかつたでじょうな

「あんたは大阪そんの天才だけど、神戸は別モノだけあっておきました」

万国博のお祭り広場の催し物はすべてこの

梅田コマ・スタジアム社長。脚本も

アム社長。脚本も

「博多っ子で、ドンタク聞いて育つてきま

したから」

「鈴木」の血は日商岩井、神戸製鋼などに

引きつがれている。上演は来月二日から大阪

コマ劇場で。二日は偶然鈴木が倒産した日

(昭和二年)。六十六歳。(須佐美誠一)

ひと



す。ポートピアを前に知事さんからぜひ『鈴木』をうて頼まれた。芝居はもともと関西が本場。その本流が衰弱している。私なりの関西文化復権の試みなんですよ。

「鈴木商店」といっても一般にはじみがない。いまの若い人たちに受けますか。

「いくら三無主義つたって、安宅産業の崩壊、商社の情報収集力、ロッキード事件、その功罪ぐらいは関心があるでしょ。米の買ひ占めというテーマによる焼き打ち、金融恐慌

(昭和二年)で『鈴木』が撤退する。日本経済史の二コマがすでにドラマです」

（昭和二年）。六十六歳。(須佐美誠一)

作者のことば

イバシロ

ミヤ

ミヤ

つたことも確かです。

しかし後藤新平氏は集約された政治家と考えて下さればと思ひますし、又高畠誠一氏は金子直吉氏と対する近代合理化を重視する青年企業家の代表としてご覧下さい。

正直言つて実存された人物ばかりで、私はかなり苦しみ抜きましたが、あえてそうしなければこのドラマは成立出来なかつたからなのです。

しかし鈴木商店におけるお家さんと奉公人の主従関係、ことに金子直吉氏の精神だけは表現したつもりです。とまれ海の向うに何がある。太平洋につながり、居留地のあつた神戸でなければ生まれぬ商人、それでいてただひたすらに店の為にお家さんの為にと私慾をみじんも抱かなかつた儒教商人金子直吉氏と、その彼にすべてをまかし切つたよね未亡人。今では失われた商人の世界です。

しかし、それで居て金子直吉氏は後に神戸製鋼、帝人、日商岩井等々多くの工商業界を経営する大いなる人材という遺産を残しているのです。

明治から大正期へかけた偉大なる神戸商人。私はそれをただ皆さん方に訴えたかったのです。最後にこのドラマに関して多くの資料や意見を下さった神戸大学桂芳男教授、故柳田富士松氏のご子息柳田義一氏に深く感謝を申し上げます。

今や鈴木商店の名はなくなりましたが、それでいて生涯不滅の商店であることを申し上げておきます。

勿論ドラマのことですから史実を忠実に追うことは不可能で些かフィクション化しなければならなかつたことは残念です。人物の二人が一人の像になつたり、最後に出て来る後藤新平氏の登場も創作です。高畠誠一氏の入店時期など些かのずれがあつたことが過ぎなかつた金子直吉氏が、ただひたすらにお家さんの為にと、何の私欲も持たずに鈴木商店を世界の鈴木商店にまでに発展させたロマンの商人であつたことがあります。

勿論米買い占め事件の真相も、当時の政治派閥に巻きこまれることを知りました。

そしてその鈴木商店が、三井、三菱と天下三分にまでした金子直吉氏の実像を知りひどく感銘をうけました。

一番頭にしか過ぎなかつた金子直吉氏が、たゞひたすらにお家さんの為にと、何の私欲も持たずに鈴木商店を世界の鈴木商店にまでに発展させたロマンの商人であつたことがあります。

勿論米買い占め事件の真相も、当時の政治派閥に巻きこまれたことであつて人形となつた虚像であることもわかりました。

今、私は神戸でポートピアが開催されるこの好機に広く皆さん方にその真相を明かしたいと思ってこの作品を書きました。

勿論ドラマのことですから史実を忠実に追うことは不可能で時代や登場人物等に誤差のあることもあります。それに実在人物の二人が一人の像になつたり、最後に出て来る後藤新平氏の登場も創作です。高畠誠一氏の入店時期など些かのずれがあつたことが過ぎなかつた金子直吉氏が、たゞひたすらにお家さんの為にと、何の私欲も持たずに鈴木商店を世界の鈴木商店にまでに発展させたロマンの商人であつたことがあります。

勿論米買い占め事件の真相も、当時の政治派閥に巻きこまれたことを知りました。

そしてその鈴木商店が、三井、三菱と天下三分にまでした金子直吉氏の実像を知りひどく感銘をうけました。

この『海鳴りやま』は神戸の鈴木商店の物語です。

とかく米の買ひ占めによる焼き打ち事件とか、暗いイメージのある鈴木商店の史実と真相をたどつて行くうちに私は鈴木商店こそ神戸の誇るべき商店であり、同時に商社のルーツであることを知りました。

この『海鳴りやま』は神戸の鈴木商店の物語です。

金子直吉氏の実像を知りひどく感銘をうけました。

この『海鳴りやま』は神戸の鈴木商店の物語です。

金子直吉氏の実像を知りひどく感銘をうけました。

(はなと こばこ)

初稿の文書

神戸市生田ひやく
太陽鉱工業株式会社内
便はがき

13.5.7.17.13
神戸市生田ひやく
太陽鉱工業株式会社内
便はがき

神戸市生田ひやく
太陽鉱工業株式会社内
便はがき

郵便局印
13.5.7.17.13
神戸市生田ひやく
太陽鉱工業株式会社内
便はがき

十有余年で神戸の鈴木商店を世界的な大商社に育成し、大正期を代表するビッグ・ビジネスに急成長させた。その経営手腕は、わが国企業経営史上的一大驚異であった。それは、世界最古の富豪「三井」が伊勢松坂で創業して以来三百年もかけて嘗々として築いてきたことを、名もない名野川べりの鼻垂小僧から身を起した、この丁稚あがりの鈴木の大番頭、金子直吉が、なんとわずか四半世紀たらずで達成したからである。

大正九年、直吉の右腕、西川文蔵支配人が急逝したことは、鈴木の運命にとって致命的であった。台銀による鈴木の整理が大詰めを迎えたとき、株式鈴木からの「直吉の退陣」が条件とされていた。直吉の辞意が表明されると社員大会は荒れ、直吉を中心地縁で固めた「土佐派」は喧嘩し、「学卒者近代派」に反撲した。高畠の岳父（高畠夫人千代子の実父）、二代目岩治郎は、それをのめば鈴木は救われるという土壇場に直面しても、直吉と鈴木の運命を共にする決断を敢えてした。そして、直吉の比類なき忠誠心に報いるために、母子二代にわたる「最も主家らしい主家」としての誇りと誠意に燃えたのであった。ここに、鈴木崩壊の華麗さと史上類例をみないはかなさがあった。

（神戸大学教授、経済学博士）

鈴木商店を支えた人々

柳田 義一

父・柳田富士松は、生前、金子ほどに世間に知られなかつたが、父としては少しも名聞を求むることを欲しなかつた。鈴木という共同体のために、一致して仲良く充分働けば最高の幸福である、というふうに考えていた大調和主義者でもあつた。人間の体には頭があり、胴があり、手があり、足があつて、よく

え、万事自然である。又、五体もこの通りで首は上に位し、足は下に居る。前後別あり左右定まる。各々その持ち場を守つて素直にして、少しも役不足や不平をこぼさず腹も立てない。調子づいても悲觀も落たんもしない。常に静観のかまえで、刀折れ矢つくる迄男の本分を發揮したことが奥床しく思える。父が鈴木のために尽瘁してきた経歴を見ると、金子に負けない忠誠を励み、草創の頃から金子は樟脳部を担当、利劍のようじ剛利決断を行つて事を処し、父は細心砂糖部をあずかり、その穩健着実の商法を生かした。世間では金子は計画し、西川は実行し、柳田はその収穫を最も堅実に取り入れる役で鈴木の大目付役というところ、信用第一主義を楯として活躍して來た。各銀行に多額の定期預金をしていたために銀行に対する信用は絶大であつた。時に資金の必要を生じた場合は、定期預金を担保として使つたものである。

去る昭和二年四月二日、不幸幻の城と崩れ落ちたにもかかわらず、鈴木根性というか、爾来、各自各方面に離散して再建の意氣で健闘を続けて來た。倒産後三十五年目に残党の武将達に依つて辰巳会を発足させた。而して四季折々には之らに依つて会合を催し、温故知新友情の世界を続けていることも奇蹟である。

どこの会社と言わば、社員同志が互に嫉視反目して上司に同僚の非行を訴えたり、或いは流言讟口を用いて相排斥し、先輩の空腫を騒いだりするものがある事を耳にするが、鈴木には嘗てそういうものはなかつた。又、末輩が盆暮などに上役に物品を贈ることは比較的少なかつた。夫れはよね刀自の訓化よろしきを得たからであろうが、父もまたこの点は十分意を用いた。而して自分自身頗る廉潔で、何ら道楽ともなく君子然たる風格を備えて過ごした。

思えば日清戦の終わった頃、金子の思惑違ひから樟脳のハタ売りに大失敗が起り、店内名状の出来ない大騒動がもちあがつた。

調和した共同生活をしている。共同生活には、夫婦、親子、友達、職場、何れも人体に匹敵している。その機能の中の一方が欠けると馬鹿になる。慈悲が足らぬと残忍になる。勇気が過ぎ行つてもいけない。からだ全体が一つになつて働くなければならぬ。丁度、山林の樹木が一本あつても三本あつても、互に絡み合つて根を張り、風雨や地震に備え、枝が二本あると

相互に枝の伸び方を譲つて、互いにしつかりと共同生活を営んでいるということである。父と金子との取り組みも、丁度そのように旨くいっていた。父は円満な人で、常に撞球のようだと人から例えられたことがある。球は常に円満で八面玲瓏、どこが上とも尻とも分からぬ、唯々コロコロと転げ歩いて、而して一向に俺はこうだとしゃちほこばつたり、自我がない。人が突いたままに働いて柔和善順である。それでも凡人の目には見えぬが、球は一定の規格や力学上の根拠によつて動いている。したがつて、よね刀自や金子が突いたればこそ、あんなに面白く回転したが、下手な撞手にかかるては決してあのよう動かなかつたであろうと自分なりに考えている。

昔ある男が雪の朝、寝ていると下男が雨戸をガラガラと繰り開け、「旦那様、今朝はえらく雪が降つております」と言う。「そうかどうか位積つてあるか」と尋ねると、「厚さは五寸ばかりですが巾は知れません」といつた笑い話がある。この巾の知れぬのが「カネタツ」鈴木であり、金子、柳田である。その巾がなんばあるかと尺を取つて歩いたような野暮つたことはしない。鈴木には二代目鈴木岩治郎という立派な方が控えている。その上に、よね刀自の賢明なる判断と寛大なる度量でこんなことで金子に暇を出しては店の損である、一途にそう思われた。どこまでも金子の手腕を信じたからである。父もまた金子を庇護し、商売は時の運です、損害は大きくとも命を賭ければ必ず取り戻せることです、もう一度金子に委せて骨を折らして下さい、と同僚の非を口にせず、失敗を慰め一致協力、善処を誓いながらこんな事から、厳肅の中に慈愛の溢れるよねの意図が、世界の鈴木へと発展させて参つたことと思われる。

今回計らずも梅田コマ劇場の晴れの舞台『海鳴りやまづ』が上演されることは、鈴木につながるものとして無上の光栄と感謝感激にたえません。また、地下の先人達も冥して余りあると信じて止みません。

海鳴りやまづ

義一

哀別に暖簾の紺が濃ゆくなる

海鳴りのボスター吊られ春の虹
商魂の袋の氷は溶け易し

法師蟬鳴けば汽笛が追いつかず
海鳴りて夕焼雲をつのらせる

丘の上人耳立てる雉の声